



芥川龍之介のすすめ

その2

『鼻』

禅智内供ぜんちないぐの鼻と云えば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から顎あごの下まで下っている。形は元も先も同じように太い。云わば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っているのである。

五十歳を越えた内供は、沙弥しゃみの昔から、内道場供奉ないどうじょうくふの職のぼに陞のぼった今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土けつとを渴かつぎよう仰ようすべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると云う事を、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも惧おそれていた。

ある秋の日、京から帰つてきた弟子が医者から鼻を短くする方法を教わつてきたと言うので、内供はこれを試すことに。すると…。

『羅生門』と『鼻』は、ほぼ同時期（『羅生門』は芥川が二十三歳の時、『鼻』はその三か月後）に発表されました。当時の芥川は、幼なじみとの結婚を家族に猛反対にされ、それがかなわず消沈してしまつた。そうした失恋のやりきれない思いを乗り越えるために、なるべく現状と懸け離れた愉快な小説を書くつもり、この二つの短編を書いたと考えられています。

「小説は一度書かれると作者の手を離れて自立するもの」とよく言われますが、執筆当時の作者の心情を頭の片隅に置いて読むと、ユーモアに溢れる『鼻』という作品も、また違う感じ方ができるのではないのでしょうか。